

看護学生の早期体験学習(Early Exposure)としての 海外研修の効果

—ソーシャルスキルと異文化理解を中心に—

宮澤純子¹⁾・井上映子¹⁾・坂下貴子¹⁾・星野聡子¹⁾・堀井素子¹⁾・飯田加奈恵¹⁾

【要旨】

本研究は、海外研修に参加した看護学生を対象に、早期体験学習としての海外研修の効果について、ソーシャルスキルと異文化理解を中心に評価し、今後の看護基礎教育カリキュラムの内容検討に資することを目的とした。対象者は2012年4月に本学に入学した看護学部学生120名である。研修前後に自記式質問紙を用いた調査を行い、109名を有効回答として分析した。その結果、①研修後のソーシャルスキル合計得点は研修前と比較して有意に高く、特に「読解」の得点が高くなっていた。②研修後の国際理解測定尺度合計得点は研修前と比較して有意に高かった。下位尺度では「他国文化の理解」「外国語の理解」の得点が有意に高くなっていた。③研修前後のソーシャルスキル合計得点、国際理解測定尺度合計得点の変化には研修前の参加意欲による相違がみられた。これらの結果から、早期体験学習としての海外研修は、ソーシャルスキル、異文化理解の点で一定の効果があったことが示された。また、研修への参加意欲によってその効果に差のあることが示され、今後、研修効果を高めるための準備や効果に関連する要因などについて、さらに検討を重ねていきたいと考えている。

キーワード：早期体験学習(Early Exposure)、看護学生、海外研修、ソーシャルスキル、異文化理解

I. はじめに

本学看護学部では、1年次の5月に必修科目である看護学概論の授業の一環として9日間の海外研修を行った。この研修は、入学してまもない時期の早期体験学習(Early Exposure)と位置づけており、研修先である米国カリフォルニア大学リバーサイド校(University of California, Riverside: UCR)と本学看護学部教員による看護学概論のジョイント授業、周辺の医療施設の見学、現地Riverside City College(RCC) School of Nursingの看護学生との交流等を実施した(表1)。研修中の宿泊はすべてホームステイで、1~2名で1家庭に滞在した。

早期体験学習は、医療職の育成において専門的知識を学習する前の早い段階で医療の現場を体験することにより、専門教育への動機づけやコミュニケーション学習、幅広い人間観を養うことにつながる効果的な方

¹⁾ 城西国際大学看護学部看護学科

法として知られ、さまざまな取り組みが行われている(柳, 2002; 駒澤, 2003; 嘉手苺, 2004; 真野, 2007)。

看護系大学には、長い職業生活においてあらゆる場、あらゆる利用者のニーズに対応できる応用力のある国際性豊かな看護系人材の養成が求められており、そのための高度なコミュニケーション能力も要請されている(文部科学省, 2011)。この点をふまえて研修では、講義・施設見学・異文化交流等を通じて、初めて看護を学ぶ学生が「看護とは何か」ということについて思考を深め、看護への興味・関心を高めると同時に、看護実践の基盤となる多様性の理解やコミュニケーション能力を高めることを目的としている。近年、日本に在住する外国人が増加し、医療の国際化が進む中で異文化理解の重要性が高まっている。異文化との接触到に基盤をおいた体験学習は、多様なコミュニケーションの方法を身につけ、異質なものに対する寛容な態度、状況に応じて行動することのできる柔軟性、多様な価値観に対する理解を養う効果的な方法であると言われている(川口, 2000)。つまり、異文化理解は単に国際化への対応にとどまらず、少子化・核家族化によって家族や友人以外との関わりの経験が少ない学生が、さまざまな年代や社会背景、生活習慣を持つ人々の社会・心理的状況を理解することにつながっていくのではないかと考えられる。

本研究は、海外研修に参加した看護学生を対象に、早期体験学習としての海外研修の効果について、コミュニケーションスキルを含むソーシャルスキルと異文化理解を中心に評価し、今後の看護基礎教育カリキュラムの内容検討に資することを目的とした。

表 1 看護学部海外研修プログラムの内容

日次	A グループ日程		B グループ日程	
1		出発・UCR Registration & Orientation(ホームステイ開始)		
2		The Japanese American National Museum 他 見学		
3		St. Francis Medical Center 見学		
4	AM	移動	本学教員講義 『看護師に求められる能力』	
	PM	Ronald Regan UCLA Medical Center 見学	RCC Nursing School 教員講義 『看護の機能と役割』	
5	AM	UCR 教員講義 『米国の看護の歴史』		
	PM	UCR 教員講義 『医療におけるコミュニケーション・災害看護』・RCC 看護学生との交流		
6		4 日目の日程で A・B グループ入れ替え		
7	AM	研修のまとめ		
	PM	Farewell and Certificate Ceremony(修了式)		
8・9		移動日・帰国		

II. 方 法

1. 対象者

2012年4月に本学に入学した看護学部学生120名全員を対象とした。

2. 調査の手続きおよび方法

調査は自記式質問紙を用い、研修説明の時間の一部を利用して研修前(入学時)と研修後(帰国2日後)に行った。質問紙の内容は、①属性、②学生の海外経験、③海外研修への期待と目標、④ソーシャルスキル、⑤異文化理解、⑥その他(海外研修での学び、など)であった。ソーシャルスキルの測定には、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川, 2005)を、異文化理解の測定には、国際理解測定尺度(IUS2000)(鈴木, 2000)を使用した。

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度：

ソーシャルスキルとは、対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発現を可能にする認知過程との両方を包含する概念である(相川, 1996)。ソーシャルスキル自己評定尺度は、「関係開始」(相手とすぐのうちとけられる、など：8項目)、「解読」(表情やしぐさで相手の思っていることがわかる、など：8項目)、「主張性」(自分が不愉快な思いをさせられたときにははっきりと苦情を言う、など：7項目)、「感情統制」(感情をあまり面にあらわさないでいられる、など：4項目)、「関係維持」(相手の立場を考慮して行動する、など：4項目)、「記号化」(表情が豊かである、身振り手振りをまじえて話すのが得意である、など：4項目)の6つの下位尺度、計35項目で構成されている。この尺度はソーシャルスキルを「コミュニケーションスキル」と「対人スキル」の2つの側面から同時に測定できるという特徴がある。4段階のリカートスケールで、回答者はそれぞれの項目について「ほとんどあてはまらない」(1点)～「かなりあてはまる」(4点)のいずれかを選択する。得点が高いほどソーシャルスキルが高いと評価する。

国際理解測定尺度(IUS2000)：

日本ユネスコ国内委員会の国際理解教育における基本目標をもとに作成され、「人権の尊重」(他国民、多民族に対する感情、平等意識：16項目)、「他国文化の理解」(他国文化に対する理解、関心、共感性：24項目)、「世界連帯意識の育成」(人類の共通課題への関心および認識、国際的協力機構への協力的態度：16項目)、「外国語の理解」(外国語に対する理解、関心：16項目)の4つの下位尺度、計72項目で構成されている。「あてはまらない」(1点)～「あてはまる」(5点)のいずれかを選択して回答する5段階のリカートスケールであり、合計得点と下位尺度得点を算出する。得点が高いほど国際理解が高いと評価する。

3. 分析

分析には統計ソフト IBM SPSS Statistics Ver.19を使用した。研修前後のソーシャルスキル得点、国際理解測定尺度得点の比較には対応のあるt検定(paired t-test)を、学生の海外経験、参加意欲による群間の比較は一元配置分散分析(ANOVA)によって行い、その後の多重比較にはTukey法を

用いた。

4. 倫理的配慮

本研究は、城西国際大学地域福祉・医療研究センター倫理委員会の承認(第 24-02 号)を得て実施した。対象者には研究の目的、方法、参加および回答は任意であることを記した文書を示し、口頭で説明した。参加への同意は同意書への署名によって確認した。

Ⅲ. 結果

1. 回収率

研修前の調査は 120 名(回収率 100.0%)、研修後の調査は 119 名(回収率 99.2%)の回答を得た。この 119 名のうち、研修に欠席した 1 名とソーシャルスキル自己評定尺度・国際理解測定尺度の回答に欠損のあった 9 名を除いた 109 名を分析対象とした。

2. 対象者の属性

対象者の性別は、男性 15 名(13.8%)、女性 94 名(86.2%)であった。年齢は 18~24 歳(Mean=18.1, SD=0.69)、全体の 93.6%は 18 歳であった。

3. 海外経験

今回の研修がはじめての海外であるという学生は、71 名(65.1%)、1 ヶ月未満の滞在経験者は 30 名(27.5%)、1 ヶ月以上の滞在経験者は 8 名(7.3%)であった。外国人との交流について、外国人の教員に習った経験のある学生は 99 名(90.8%)、外国人の親戚がいる学生は 7 名(6.4%)、外国人の友人(手紙や e-mail、Twitter、Facebook 等による交流のみのも含む)がいると回答した学生は 38 名(34.9%)であった。

4. ソーシャルスキル得点と研修による変化

学生のソーシャルスキル合計得点は、研修前 67~129 点(Mean=95.5, SD=11.48)であり、研修後 59~133 点(Mean=98.13, SD=13.13)であった。研修前後のソーシャルスキル合計得点・下位尺度得点を表 2 に、尺度間の相関(研修後)を表 3 に示した。研修前と研修後の比較では、合計得点($t(108)=3.03, p<.01$)と、「関係開始」($t(108)=2.31, p<.05$)、「解説」($t(108)=4.41, p<.001$)の 2 つの下位尺度において、研修前よりも研修後の得点が有意に高いという結果であった。一方、「感情統制」($t(108)=2.40, p<.05$)については、研修前より研修後の得点が有意に低いという結果であった。

表2 研修前後のソーシャルスキル得点 (n=109)

	研修前		研修後		t 値
	平均	SD	平均	SD	
関係開始	21.4	4.47	22.1	4.43	2.31*
解読	21.9	3.61	22.4	4.09	4.41***
主張性	17.7	3.52	18.2	3.93	1.92
感情統制	9.8	2.38	9.4	2.55	2.40*
関係維持	12.4	1.47	12.5	1.81	0.55
記号化	12.3	2.15	12.6	2.05	1.89
合計得点	95.5	11.47	98.1	13.13	3.03**

***p<.001, **p<.01, *p<.05

表3 ソーシャルスキル得点の尺度間相関(研修後) (n=109)

	1	2	3	4	5	6	7	α
1. 合計得点	1.00	.80***	.79***	.76***	.31**	.79***	.56***	.92
2. 関係開始		1.00	.45***	.50***	.06	.53***	.55***	.87
3. 解読			1.00	.50***	.21*	.59***	.31**	.88
4. 主張性				1.00	.06	.50***	.36***	.86
5. 感情統制					1.00	.37***	-.25*	.74
6. 関係維持						1.00	.45***	.73
7. 記号化							1.00	.74

Pearson's correlation coefficient (r) ***p<.001, **p<.01, *p<.05

5. 国際理解測定尺度得点の研修による変化

学生の国際理解測定尺度合計得点は、研修前 198~311 点(Mean=249.0, SD=27.07)、研修後 190~337 点(Mean=257.5, SD=33.73)であった。

研修前後の国際理解測定尺度合計得点・下位尺度得点を表4に示した。研修前と研修後の比較では、合計得点(t(108)=3.93, p<.001)と、「他国文化の理解」(t(108)=3.23, p<.01)、「外国語の理解」(t(108)=8.08, p<.001)の2つの下位尺度において研修前よりも研修後の得点が有意に高いという結果であった。一方、学生の海外経験による研修前の国際理解測定尺度得点の比較では、合計得点、下位尺度得点ともに「海外滞在経験なし」「1ヶ月未満」「1ヶ月以上」の群間に有意な差はみられなかった。

表 4 研修前後の国際理解測定尺度得点 (n=109)

	研修前		研修後		t 値
	平均	SD	平均	SD	
人権の尊重	66.0	7.05	66.3	9.13	.53
他国文化の理解	77.2	11.80	80.0	12.26	3.23**
世界連帯意識の育成	60.9	8.20	60.5	9.41	.47
外国語の理解	44.9	8.06	50.7	9.82	8.08***
合計得点	249.0	27.07	257.5	33.73	3.93***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

6. 研修への参加意欲とソーシャルスキル合計得点・国際理解測定尺度合計得点

研修後の調査で学生に「研修に行く前は、行きたくない気持ちの方が強かった」かどうかを尋ねた結果、「あてはまらない」「どちらかというにあてはまらない」と回答し、研修への参加意欲が高い学生(参加意欲“高”)は無記入5名を除いた104名中44名(42.3%)、「どちらともいえない」と回答した学生(参加意欲“中”)は24名(23.1%)、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答し、研修への参加意欲が低い学生(参加意欲“低”)は、36名(34.6%)、であった。

研修前のソーシャルスキル合計得点を研修への参加意欲により3つの群に分けて比較した結果、合計得点($F(2,101)=3.85, p<.05$)、と下位尺度の「関係開始」($F(2,101)=4.45, p<.05$)において有意な差があり、多重比較(Tukey法)により参加意欲“高”の学生は参加意欲“低”の学生の得点よりもソーシャルスキルの合計得点および「関係開始」の得点が有意に高い($p<.05$)ことが示された。研修前の国際理解測定尺度の得点には、学生の参加意欲による差はなかった。研修前の国際理解測定尺度の得点には、学生の参加意欲による差はなかった。

研修前後のソーシャルスキル合計得点・国際理解測定尺度合計得点を研修への参加意欲別に比較した結果を図1、図2に示した。ソーシャルスキル合計得点は、参加意欲“中”の学生において研修前よりも研修後の得点が有意に高かった($t(23)=4.23, p<.001$)。参加意欲“高”、参加意欲“低”に研修前後の得点の有意な差はなかった。国際理解測定尺度合計得点は、参加意欲“高”($t(43)=3.90, p<.001$)、参加意欲“中”($t(23)=2.52, p<.05$)は研修前よりも研修後の得点が有意に高かった。

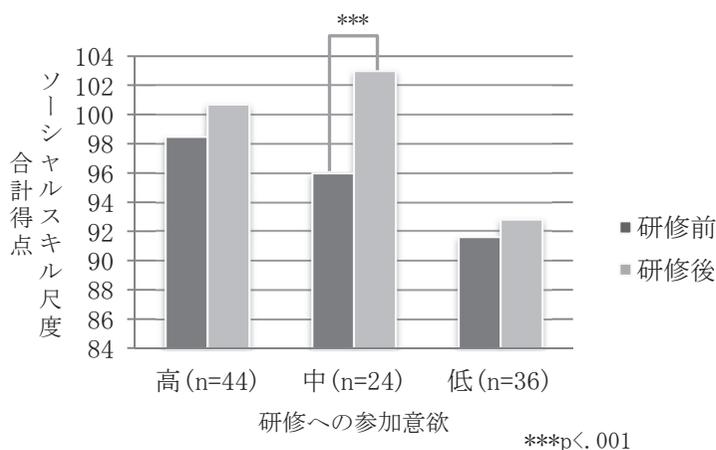


図1 研修への参加意欲とソーシャルスキル尺度合計得点 (n=104)

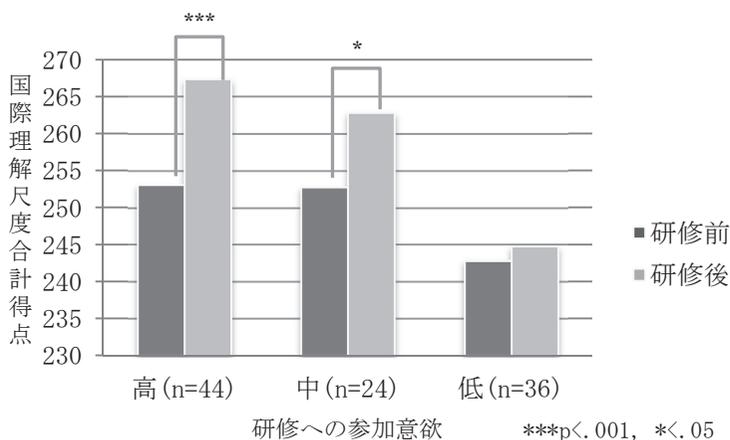


図2 研修への参加意欲と研修前後の国際理解尺度合計得点 (n=104)

IV. 考 察

1. 学生のソーシャルスキル得点と研修による変化

Travelbee(1974)が、「看護は対人関係のプロセスである。」と述べているように、看護は人との関わりの中で行われるものであり、ソーシャルスキルは看護師に必要な実践能力のひとつである。学生の対人関係能力の低下が指摘される中、ソーシャルスキルの向上は看護基礎教育における課題である。古西ら(2004)は、理学療法学生 9 名の海外研修(米国、8 日間)の自己評価において、“文化的多様性”や“相互依存と共同”についての理解が深まり、多様な人々とのコミュニケーション技能の向上が認められたことを報告している。本研究では、研修に参加した 109 名のソーシャルスキル得点が、合計得点と「関係開始」「解読」の 2 つの下位尺度で研修後に有意に高いという結果

であり、海外研修での体験がソーシャルスキルの向上に結びつくこと、特に、初めて接する人とのコミュニケーションを円滑に行える「関係開始」や、相手の意思を察することのできる「解読」のスキルが向上したことが示された。

表3に示したように、6つの下位尺度の中で、「感情統制」のスキルだけは、合計得点、他の下位尺度との相関が低く、研修後の得点平均も研修前よりも低くなっていた。相川(2005)は、「感情統制」のスキル尺度はほかの下位尺度との相関が低いまたは負の相関関係にあり、他の尺度とは異質であると述べており、本研究でも同じような結果となった。「感情統制」の意味するところは、感情を面に出さないということであり、自分をコントロールし相手を否定するような態度をとらないようにするという点で対人関係に必要なスキルである一方、肯定的な感情を抑えることにもつながることから、施設見学やホームステイなどで求められた「自分の意見をはっきりと伝えること」と「感情統制」のスキルは相いれないものであり、研修後に「感情統制」の得点が有意に低くなっている原因と考えられた。

2. 学生の国際理解測定尺度得点と研修による変化

学生の過去の海外滞在経験による国際理解測定尺度得点の有意な差はみられなかったが、研修前後の得点には差があり、合計得点と「他国文化の理解」「外国語の理解」の下位尺度において、研修前よりも研修後の得点が高いという結果であった。この結果は、単に海外に行くことが、ソーシャルスキルや異文化理解を高めるのではなく、海外経験の質が関連していることを示している。今回の研修は、ホームステイを実施し、講義や施設見学等も含め、全行程を通して日米の社会・文化の違いに触れたり、積極的にコミュニケーションをとったりする機会の多いプログラムであり、より国際理解を高めたのではないだろうか。

3. 研修へ参加意欲と研修の効果

研修への参加意欲別の比較では、参加意欲が高いほど研修前のソーシャルスキル合計得点が高かった。言い換えれば、意欲の高い学生はソーシャルスキル合計得点が高いために新しい物事を肯定的にとらえ、意欲も高いといえる。では、意欲が高いほどソーシャルスキル合計得点の変化も大きいのかというとそうではなく、研修前後のソーシャルスキル合計得点に有意な差があったのは、中程度の参加意欲を示した学生であった。意欲“中”の学生は、いろいろな不安もあり、行きたい気持ちと行きたくない気持ちが入り混じる中で研修に参加し、体験を通してソーシャルスキルの向上をより強く自覚したのではないだろうか。研修後のソーシャルスキル合計得点では参加意欲“中”の学生の得点平均が参加意欲“高”の得点平均を上回る結果となった。

国際理解測定尺度合計得点においては、参加意欲“高”、“中”の学生は研修後の得点が有意に高くなっていた。特に、参加意欲“高”の学生では得点が高くなり、国際理解が深まったことがうかがわれた。

一方、参加意欲“低”の学生は、ソーシャルスキル合計得点、国際理解測定尺度合計得点ともに研修前後の有意な得点の変化はなかった。これらの結果は、学生の参加意欲が海外研修での学習効果に関連することを示しており、今後は参加意欲に関連する要因を検討し、研修前にどのように意欲

を高めていくかという点について考える必要がある。また、参加意欲"低"の学生は、研修前のソーシャルスキル合計得点、下位尺度の「関係開始」得点が、参加意欲"高"の学生よりも有意に低いという特徴が示されており、ソーシャルスキルに注目した準備教育も研修での学習効果を高めるためのひとつの方法であると考えられた。

医療系学部の海外研修の多くは、希望者を対象として行われている。そのような場合には参加意欲が低い学生、行きたい気持ちがあっても迷っているような学生は参加しないであろう。今回、参加意欲“中”の学生にソーシャルスキル、異文化理解の双方に効果がみられたことは、海外で学びたいという気持ちが強くなっても、海外経験による学びの可能性が十分にあることを示すものである。

4. 研究の限界と今後の課題

本研究は、研修の短期的な効果を示すものであり、今後、学生のソーシャルスキルや異文化理解が早期体験学習の効果としてどのように変化していくのか、この経験が隣地実習でどのように役立つのかなど、引き続き検討していきたいと考えている。また、柳ら(2002)は、早期体験学習のプログラムの順序によって学生の満足度が変化することを報告しており、研修中の変化についても評価しプログラムの充実にむすびつけていきたい。

V. 結 論

看護学部1年生109名を対象として海外研修前後に質問紙調査を行った結果、①研修後のソーシャルスキル合計得点は研修前と比較して有意に高く、特に「解説」の得点が高くなっていた。②研修後の国際理解測定尺度合計得点は研修前と比較して有意に高く、下位尺度では「他国文化の理解」「外国語の理解」の得点が有意に高くなっていた。③研修前の参加意欲によって、研修前後のソーシャルスキル合計得点、国際理解測定尺度合計得点の変化には相違がみられ、参加意欲の低い学生の研修前後の合計得点には有意な差がみられなかった。これらの結果から、入学してまもない時期に行った海外研修では、ソーシャルスキル、異文化理解の点で早期体験学習として一定の効果があったことが示された。また、研修への参加意欲によってその効果に差のあることが示され、今後、研修の学習効果を高めるための準備や学習効果に関連する要因などについて、さらに検討を重ねていきたい。

文 献

- 相川充(1996). 社会的スキルという概念. In 相川充, 津村俊充(編), 社会的スキルと対人関係: 自己表現を援助する (pp.3-21). 誠信書房.
- 相川充, 藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成. 東京学芸大学紀要, 第一部門, 教育科学, 56, 87-93.
- 堀篤実(2012). ピアヘルピングに関する学習とソーシャルスキルの変化についての検討. 東邦学誌, 41(1), 127-136.

- 堀匡(2011). 大学新入生を対象とした傾聴スキルに関する心理教育の効果. 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 6, 71-78.
- 古西勇, 高木昭輝, 黒川幸雄(2004). 海外研修による学生の内面的変化の評価. 新潟医療福祉学会誌, 4(1), 30-36.
- 嘉手苺英子, 上原綾子, 名城一枝, 大田貞子, 金城忍, 上江洲貴乃, 安里葉子(2004). 看護の概念形成を目的とした初期看護実習の展開方法. 沖縄県立看護大学紀要, 5, 59-65.
- 川口恭子(2000). 異文化理解と異文化経験—バングラデシュスタディーツアーの経験を通して—. 看護学統合研究, 2(1), 1-10.
- 駒沢伸泰, 飯塚徳重, 筒井秀作, 川崎富夫, 杉原勝子, 松澤佑次, 門田守人(2003). 早期臨床体験が医学生に与える影響とその意義について—患者—医師関係に対する医学生のさまざまな探究も含めて—. 医学教育, 34(3), 193-198.
- 真野泰成, 野口隆志, 山田治美, 原明義, 武田弘志, 伊賀立二(2007). 早期体験学習(Early Exposure)の実施とその評価—国際医療福祉大学薬学部における取り組み—. 医療薬学, 33(8), 702-709.
- 文部科学省(2011). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告.
- 鈴木佳苗, 坂元章, 森津太子, 坂元桂, 高比良美詠子, 足立にれか, 勝谷紀子, 小林久美子, 樫淵めぐみ, 木村文香.(2000). 国際理解測定尺度(IUS2000)の作成および信頼性・妥当性の検討. 日本教育工学会論文誌, 23(4), 213-226.
- Travelbee, J.(1974). トラベルビー 人間対人間の看護(長谷川 浩、藤枝 知子訳). 医学書院.
- 柳久子, 戸村成男, 森淑恵, 江守陽子, 紙屋克子(2002). 医療・福祉現場における早期体験学習(early exposure)—筑波大学医学専門学群における経験—. 医学教育, 33(1), 43-49.

The Impact of Early Study Abroad Experience on Nursing Students

— Focus on Social Skills and Cross-cultural Understanding —

Junko Miyazawa, Eiko Inoue, Takako Sakashita,
Satoko Hoshino, Motoko Horii, Kanae Iida

Abstract

The purpose of this study was to investigate the impact of short-term early exposure study abroad on nursing students. One hundred twenty nursing students, who entered university in April 2012, participated. One hundred nine fully completed questionnaires were analyzed. Findings confirmed significant differences between pre-test and post-test results of social skills scores and cross-cultural understanding scores. However the differences of social skills scores and cross-cultural understanding scores among the three groups separated by motivation level were significant. These findings showed the study abroad program had a positive impact on nursing students' social skills and cross-cultural understanding. Findings from this study have implications for the need to motivate students.

Key words:

early exposure, nursing students, study abroad, social skills, cross-cultural understanding